

CONTENTS

- 2 新川和江賞
- 4 消費者行政の取り組みについて
- 5 平成28年度「市長へのご意見箱」結果報告
- 6 鹿窪運動公園多目的運動場をサッカー場として改修・整備しています
- 7 平成28年度結城ブランド認定品が決定
- 8 市民のページ
- 10 ゴミレンジャー
- 10 結城ブランド
- 11 ひとの人権わたしの人権
- 11 男女共同参画社会
- 12 シリーズ介護保険
- 12 けん口広場2017
- 12 薬
- 13 健康増進センターだより
- 13 市民健康教室
- 14 ゆうき図書館からのお知らせ
- 14 市民活動レポート
- 15 文化講演会

表紙の写真



「第17回結城シルクカップロードレース大会」

2月19日(日)、「第17回結城シルクカップロードレース大会」が開催されました。詳しくは、市民のページ記事をご覧ください。

第9回

新川和江賞

未来をひらく
詩のコンクール

創設9周年

市民情報センターで2月12日、第9回新川和江賞「未来をひらく」詩のコンクールへの表彰式が行われました。

新川和江賞は、市民情報センターとゆうき図書館の開館5周年記念事業として、本市の名誉市民であり、ゆうき図書館名誉館長の詩人・新川和江さんの名を冠して創設された、詩のコンクールです。

今回は応募数2304篇の中から、新川和江賞（最優秀賞）に浅利直弥さん（結城小学校6年）が輝き、優秀賞に8人、優良賞に26人が選ばれました。表彰式では、受賞者による受賞作品の朗読と、新川さんによる講評が行われました。

新川和江賞

河原の石

結城小学校 六年 浅利直弥

河原にはたくさんさんの石がある
山の上から転がって行きつく先は大海原
上流の水は、速い。
まるで新幹線のように
その石と石がぶつかり
ケンカしている
まるで、おじさんが怒っているようだ

中流の水は、おだやか。
まるで自転車に乗っている高校生のよう
おだやかな流れで運ばれてくるのは
少し丸くなった角ばった石
その石と石がぶつかり
遊んでいる

下流の水は、のんびり。
まるで、散歩しているおばあちゃんのような
のんびりな流れで運ばれてくるのは、丸い石
その石と石がぶつかり
笑っている

フフフフ、フフフフフフと
ほほえんでいるようだ

どんどん どんどん 丸くなり
どんどん どんどん 優しくなる
河原の石は人のよう



■新川和江さんの願い

新川さんは講評の中で、「昔は」詩を作るより、田を作れ」といわれていました。私も今いたいことは、「詩を作る前に、田を作れ」ということなんです。田を作らずに、詩を作ろうとしてもいい詩は作れないんです。田んぼは比喩的なことで、田植えをしなくてもいいんですけれども、まず身の回りの生活というものをよく見つめて、おろそかにしてはいけません。すね」「上手な詩を書くなどと全く考える必要はなく、小鳥の声を聴いたらこのようだった、雨の降る音を聴いたらこのようだった、つて心で感じたことをそのまま言葉にすればいいんです」と語りかけました。

また、受賞者が自分の作品を朗読した点に触れ、「声というものには不思議な力があります。上手、下手でなく、聞く人に訴える力がある。どんどんと人様の前で、ご自分で書いた詩を読んでもください。上手でなくていいの。今日のような読み方で十分です。心に伝わります。文字で読んだよりも、皆さんが読んだ方がずっといい詩に聞こえました」と感想を述べられました。

新川和江

昭和4年結城郡絹川村（現結城市）小森に生まれる。結城高等女学校時代に、詩人西條八十から詩の手ほどきを受け、戦後上京し詩や小説を執筆する。日本現代詩人会理事長を務め、現在は名誉会員。小学館文学賞、丸山薫賞など多くの賞を受賞。



昭和59年 結城市民栄誉賞を受賞
平成12年 勲四等瑞宝章受章
平成13年 結城市名誉市民となる
平成13年 ゆうき図書館名誉館長に就任
平成24年 結城紬大使に就任

- 受賞作品は、市民情報センター（ゆうき図書館）1階およびゆうき図書館ホームページでご覧いただけます。
- 第1回から第9回までの受賞作品は、ゆうき図書館2階新川和江コーナーにてご覧いただけます。

ゆうき図書館

☎34-0150



短評

山に降った雨が集って川となり、やがては海にたどり着く。水の旅をふつうは書きたくなるものなのですが、その水に流される石のことを書くことになった浅利さんの着眼点に、石にことよせて何かいいことをお持ちなのだな、と感じました。

〈まるで〉という言葉がたびたび出てくることに、皆さんもお気づきでしょう。〈ちようど〉とか〈そっくり〉とか、ほかの物にたとえて表現するときに用いる言葉ですが、浅利さんのこの詩の場合、その比喩表現が、目がさめるように新鮮で、豊かで、それにユーモアがあるので。急な流れを〈新幹線〉にたとえ、おだやかになった中流の水を、長い脚がゆつくりとペダルを踏む〈自転車に乗った高校生〉の姿を私たちに連想させてくれます。上流でははげしくぶつかり合っても、平野を流れる川の中では、〈鬼ごっこしている子ども〉のように、たのしげになります。ずっと読みすすんでいくと、河原の石に浅利さんは、人間の一生を重ねて書くことになったのではないかと、ということが分かってきます。たのしいだけでなく、深い重みも持った作品です。

